

Y17a 歴史資料からたどる江戸時代の天文遊歴家朝野北水の活動範囲

陶山徹 (長野市立博物館)

江戸時代は、西洋の科学技術が流入し、日本の天文学は大きく変わった時代である。この時代に全国各地を歩き、人々に星を教えた男がいた。名を朝野北水という。北水に関係していると思われる資料が全国各地に残されているが、彼の活動範囲と講義内容については謎が多い。北水の講義の特徴は、初等的な内容を工夫して分かりやすく伝える点にある。そのため、彼の講義が当時の人々に広く受け入れられ、今でも全国各地に北水関連資料が残っていると考えられる。そうであるとすれば、北水関連資料を調べ、彼の足跡と講義内容を明らかにすることは、江戸時代の人々の天文への興味・関心について知ることにつながる。江戸時代の天文学史としては、幕府天文方の改暦やそれに関係した観測、当時の観測機器についての研究が重要視されることが多い。科学としての天文学を考える上では、これらが重要であるのは、誰もが認めるところだろう。しかし、当時の人々が天文をはじめとする身のまわりの自然についてどのように興味を持っていたのかを知ることが、当時の天文学の裾野の広さを知るという意味で重要であろう。本研究では全国各地に残る史料を調べ、その内容と署名などから北水関連資料の同定を行なった。さらに、このようにして作った北水関連資料リストの内、由来が明らかな資料群に注目することで、北水がいつ、どこで、どのような講義を行ったかを知ることができた。具体的には、朝野北水は、文化文政期を中心に、東北、北陸、長野、近畿など国内の広い範囲で活動をしていたことがわかった。